第一章　集　落

第一節　集落の発達と地理

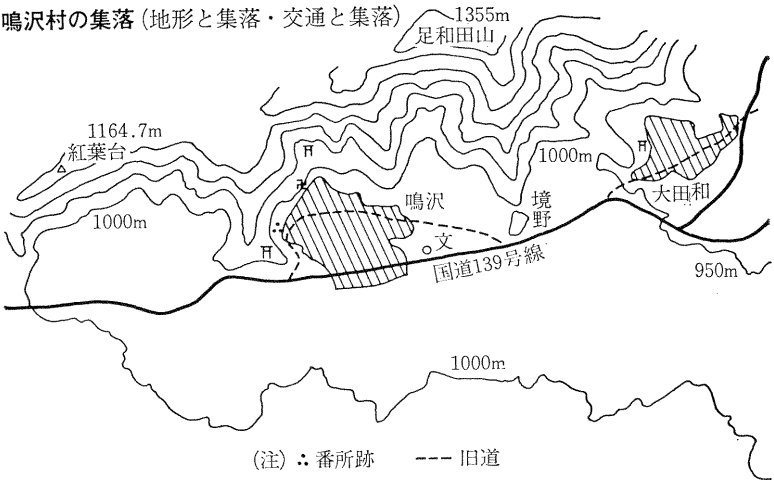
一　地形と集落

鳴沢村は北に足和田山（一三五五㍍）、紅葉台（一一六四・七㍍）などを境として足和田村に、南は富士山を挾んで静岡県富士宮市に、東は北から勝山村、河口湖町、富士吉田市に接し、西は大室山、片蓋山（ともに富士側火山）を境に上九一色村に接している。足和田山は新第三紀中新世の御坂層で、石英安山岩質凝灰岩及び礫岩から成り、その南麓はいくつかの尾根がつき出して、南へ向いた椀状の弧をえがいて少さな盆地状の平地をつくっている。

南は富士の裾野の末端がこの盆地状の平地にまで及んでいるが、鳴沢部落から東は新富士火山の旧期噴出物でカンラン石玄武岩より成り、鳴沢部落から西は貞観六年（八六四）長尾山（側火山）から噴出した新期噴出物で青木ヶ原丸尾と称される溶岩流である。

鳴沢村の鳴沢、大田和の二つの集落は、この足和田山南麓と富士の裾野の接触部の低いところに南と北から浸食流下した堆積物によって小扇状地あるいは小盆地が形成されたので、この地域としては最も平坦で肥沃な土地である。ここに鳴沢と大田和の集落が発達した。東の大田和と西の鳴沢との間には足和田山の尾根がつき出して境をなしており、地名を境野と称し、昔は北の山上に一株、中腹に一株、山下の平地に一株の松の木が南北に三本植えられていた

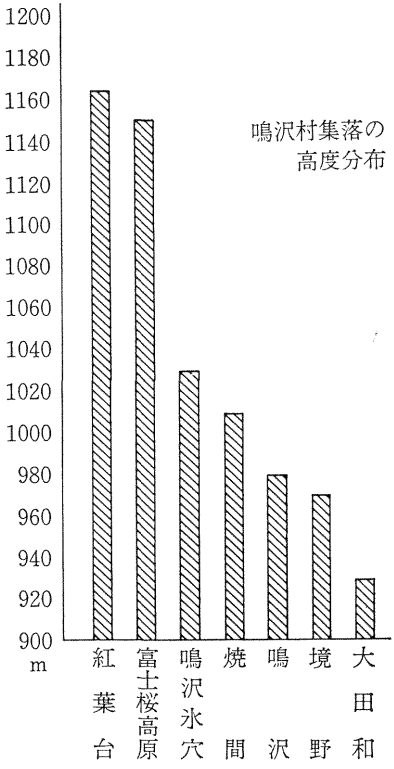
鳴沢村の集落（地形と集落・交通と集落）



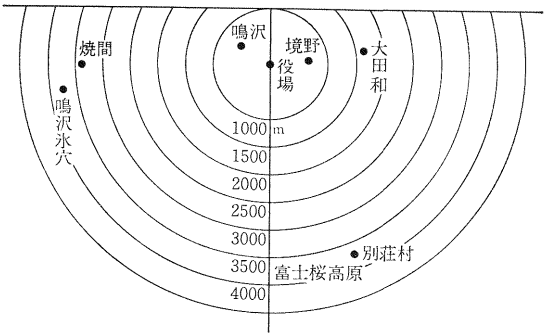
（注）∴番所跡　　--- 旧道

ので三本松と呼んでいた。いま鳴沢村総合センター（中央公民館）はこの地に建てられている。

鳴沢部落の西南へつき出した尾根があり、ここと焼間との間、紅葉台南麓にも椀形の小盆地があるが、ここは青木ヶ原熔岩流が山麓まで及んでいるので集落は発達しなかった。大田和部落は標高九三〇㍍、鳴沢部落は九八〇㍍で、新期溶岩流（青木ヶ原丸尾や剣丸尾）が噴出流下する以前は、富士の裾野と足和田山の間を大田川が東流していたことは事実と思われる。



鳴沢村集落の水平分布（役場からの直線距離）



鳴沢村集落の水平分布（役場からの直線距離）

二　水と集落

富士北麓には湧水がなく、沢水も平常は枯れている。特に鳴沢村は河川も湖沼もなく、水の確保には苦難の歴史がある。足和田山の渓水を筧（とゆ）で引いて共同で用いており、冬は雪をとかして飲み水を蓄え、干ばつの時は二里余りの河口湖まで水を汲みに行ったという。鳴沢、大田和の集落は足和田山の渓水をもって飲料とし、その山麓に発達した集落である。

すなわち鳴沢集落は足和田山の渓水、特に水上水源（出口）の水を飲料水、生活用水とし、大田和集落は足和田山麓の水神堀内の湧水をひいて用水として発達してきたと思われる。

三　交通と集落

鳴沢村は中世以来甲州国中と駿河、郡内と駿河への交通の要衝であった。若彦路の大石駅（河口湖町大石）から大田和、鳴沢を経て駿河の上井出（静岡県富士宮市）に至る道を神野路といった（『甲斐国志』）。治承四年（一一八〇）安田義定らの甲斐源氏がこの神野路を通り鉢田のあたりで駿河の目代橘遠茂の軍と戦い、これを大いに破った（『吾妻鏡』）。また頼朝が神野の宿所に入ったという記事もある（『吾妻鏡』）。この神野路に鳴沢の関があった。鳴沢部落を通過する旧道の西はずれ、青木ヶ原溶岩の流端部にあった。

戦国期には武田氏支配下に属し、永禄四年（一五六一）五月十日付「本栖在城ニツイテ其ノ経費トシテ鳴沢ノ関役銭六月分ノ三分ノ一ヲ充テル」という武田晴信印判状があり（『甲斐国志』）、すでに鳴沢の関があって関銭を徴収して

いたことが知られる。武田滅亡後、甲州は徳川・北条の争奪の場となったが、天正十年七月、徳川家康が中道往還を通って甲州に入るとき、九一色衆の首領渡辺囚獄佑が郡内に侵入してきた北条軍を破って大勝したのもこの富士北麓であった。それで家康は渡辺囚獄佑に九一色衆を付属させて家康入国の警固を命じた。これをみても富士北麓を通ずるこの道（駿州往還・神野路）は甲駿相の軍事上重要な道であった。

また『甲斐国志』に「本村ヨリ富士ノ北麓神野路ヲ経テ駿州富士郡上井出村ニ出ヅ、又道ヲ右ニ取レバ人穴村ヘ出ヅ、此ノ間七里人家ナク又水ナシ、往来スル者水穀ノ用意ナケレバ必ズ飢渇ニ及ベリ」とあり、今の富士ヶ嶺地区（富士豊茂）を横断して駿河に至る道が当時も神野路から分岐してあったようである。

鳴沢の関は江戸期において口留番所となった。成沢番所がこれで、郡内領から甲駿国境を越えて東海道吉原に通ずる「駿州往還」に設けられた番所である。この番所は村請の番所であったようで「御扶持方モ不被下百姓番ニ被仰付殊之外百姓困窮仕リめいわくニ奉存候トアリ、此ノ後程ナク享保ノ比所々ノ番所トトモニ廃跡トナレリ」（『甲斐国志』）とあり、平和時においてはその重要性がなくなって、享保年間に廃止された。明治四十二年発刊の『南都留郡誌』に鳴沢番所について「鳴沢村ノ西端ニアリ礎石今ニ存ス、宝永ノ頃一旦廃セシガ松平甲斐守本郡預リノ時再ビ修造セリト、享保ノ頃全ク廃趾トナル」とある。このように神野路（駿州往還）は富士北麓の重要な交通路で、その沿道に大田和、鳴沢の集落が発達したのである。

四　地名のおこり

(1)　鳴沢

さぬらくは玉の緒ばかりこふらくば布自（ふじ）の高根の奈流佐波のごと（万葉　駿河国歌　作者不明）

さみだれは高根も雲のうちにしてなるさは富士のしるしなりける（俊頼朝臣）

など、口歌に「なるさわ」の名が多く見える。

『甲斐志料集成』の記述によると、鳴沢は鳴沙（なるさ）とも云へり、なるさとは山よりイサゴふる事あり、其の鳴る音を鳴沙という（藻塩に一説あり）とあり、一説には往古富士の八葉（山頂の噴火口周辺の山八峰を仏教の八蓮弁にたとえていう）に池があり、その水が沢を流下するとき雷鳴のような大きな音がしたことにちなむという。また一説に貞観六年の大噴火以前に精進湖に連なる剗の海の水が流れ出して大田川となったが、当地（大田和）は往古窪地となっており、その水の落ち口では万雷のとどろくような音がしたことによるという。

里人の説に富士山の西北に数千丈の谷あり、砂礫常に流れて其の声雷の轟くが如し。中腹に下りては広さ数万歩あり、是を大沢という、然らば鳴沢は即ち大沢の事を云うなるべしと。『甲斐国志』は「按ズルニ鳴沢ノ説諸家異同アレドモ、今大沢ト称スル深壑是ナリ、其ノ頂辺ヲ親不知、子不知ト名ヅケラル、剣ケ峰ト雷岩ノ間ニ裂ケ西ニ下ル大沢ヲ俗ニ石滝ト云ヒ、滴ノ水ナシト雖モ磊塊ノ流下スルコト水ノゴトク混々止マズ、激衝シテ轟鳴ヲ発スル遠雷ヲ聞クガ如シ」と、鳴沢の起源をまとめている。

(2)　大田和

『残簡風土記』に都留郡の西大田川に限ると見えたり、今鳴沢の支村に大田和と云ふ処あり、富士山の西大沢の地続きなるべし、その地窪くして河流の痕の如し。北は崖高く峙ち、南は富士の裾野、東は大嵐村に続きて、郡の西界に当れば大田川は此の辺を云ひしなるべし（『甲斐志料集成』）とあり、また『甲斐国志』にも「地窪ニシテ河流ノ趾ノ如シ、北ハ両岸高ク峙チ山足ヲメグリ、南ハ富士裾野ニ続ケリ、崖下ニ人家アリ、此ノ窪地東ハ大嵐ニ続ケリ、是レ郡ノ西界ニ当レバ大田川ノ趾ナルベシ」とあり、明治四十二年発刊の『南都留郡誌』には「残簡風土記ニ都留郡西限大田川云々トアリ、今地形ニヨリ按ズルニ大田和ヨリ山足ヲ繞リテ大嵐に至ル間窪クシテ河床ノ如シ、蓋大田川ノ趾

ナランカ今詳ナラザレドモ富士山ノ爆火ニヨリ幾変形ヲ重ネシモノナラン」と記している。これらをみると大田和の地名は大田川に由来するものと思われる。

第二節　集落の変遷

一　集落の発生

本村内にも縄文前期・中期の石斧・石鏃などが出土した水上遺跡、縄文早期・後期の土器、石匙が出土した大田和遺跡（家上川原）や、古墳時代の前丸尾遺跡があるところをみると、すでに先史時代からこの地域に人が住んでいたことは確実である。しかしたび重なる富士山の噴火、特に歴史時代に入って天長三年の噴火、延暦十九年から二十一年の噴火、貞観六年の噴火などにより、その生活の基盤は大いに変容したと思われる。

特に貞観六年、青木ヶ原溶岩の流出によって剗の海を埋め、その末端は鳴沢まで及んできたので「古ハ此ノ辺ハ精進・本栖ノ続キニテ八代郡ニ入ルベシ、鳴沢ハ大田和ノ西半里許リニアレド思フニ古ハ此ノ辺リ都テ人家ナカルベシ」（『甲斐国志』）とあるように、集落はなかったと思われる。従って鳴沢の地域は古代『倭名抄』に郷名がない。『甲斐国志』にも「残簡風土記ニ云フ、都留郡ハ西大田川ヲ限リ東早女坂ヲ限リ、南阿曽谷ヲ限リ北武田牧ヲ限ルトアリ、和名抄ニ載スル所郷名七、相模・古郡・福地・多良・加美・征茂・都留トアリ、コノ北麓ハ郷名ナシ」とある。都留郡の境は大田川で、この地域ははじめ八代郡に属していたと思われる。

この地域は中世に入って開発され、集落も発達してきたと思われる。『甲斐国志』に「大石・長浜・大嵐・鳴沢・勝山・木立・船津・此ノ七村ヲ大原ノ庄七郷ト云フ、モト河口ノ支村浅川村ヲ加ヘテ組合八村トス、勝山ノ浅間明神

ヲモッテ産神トナス」とあり、大原ノ庄の一部であった。

ここは中世、甲州から駿河に至る若彦路の要衝で若彦路は大石峠を越えて河口湖畔の大石に下り、ここから大田和、鳴沢を経て駿州上井出（富士宮市）に至っている。いま大田和、鳴沢の部落の中を通る古道がそれで神野路と称した。戦国期には武田・今川・北条の勢力が角逐するところで、武田時代には鳴沢の関がおかれた。これが近世になって口留番所となり成沢番所といわれた（文禄以前は鳴沢といい、後成沢を村名とした時代もあったが、その後鳴沢となった）。『甲斐国志』に「成沢番所ハ村ノ西ノ端ニアリ、礎石今ニ存セリ」とある。

天正十九辛卯年十月吉日、成沢大田和村御検地帳によると、成沢屋敷拾八軒、合壱反参畝、此米一石六斗九升。大田和屋敷八軒。合四畝拾四歩、此米五斗八升。居屋敷合壱反七畝拾四歩、分米合弐石弐斗弐升七合三勺とあり（『甲斐国志』）、その時の村高参拾弐石余で『甲斐国志』の校者の記すように一致しない。畑は中畠壱町壱反弐歩、下畠壱町参反弐畝拾弐歩、下々畠参町弐反四畝弐拾歩、荒畠弐反七畝拾参歩で、下畠・下々畠が多く貧しい地域であったことがわかる。文禄三年の検地では村高六拾四石となっている（柏木家文書）。

二　近世から近代へ

鳴沢村も他の郡内村々と同じように江戸中期、秋元氏移封までは谷村藩領、後幕府直轄地となり、谷村代官支配下におかれるが、慶長六年甲斐国四郡古高帳では六拾四石、寛永元年甲斐国四郡村高帳でも六拾四石と変わっていない。享保十年都留郡郡内郷帳では六拾五石八斗四升九合で『甲斐国志』（文化三年）の記述と同じである。天保五年天保郷帳で六拾六石弐斗参升弐合、明治初年の旧高旧領取調帳で六拾五石八斗四升九合で、近世三百年間村高がほとんど変わっていないことがわかる。

鳴沢村は枝郷大田和を合わせて文化三年（『甲斐国志』）の戸数二百三十八、人口九百七十二（男四百八十二・女四百九

十）であった。山稼ぎが主業で、『甲斐国志』によると藩領時代は代々材木百～二百丁と巣鷹とを上納し、年貢・諸役を免除されていたという。幕府領となってから材木の御用がなくなり金六両壱分を山役として上納することになった。作物は麦、粟、稗、大豆、小豆、蕎麦、玉蜀黍のほか野菜類で、農閑期には男は富士山中に入って材木を伐り出し、他所に売って生計をたてていた。女は麻布、木綿等を織っていた。

明治五年都留郡第五区に属し、大嵐村・長浜村・西湖村と鳴沢村で四ヵ村組合村を構成したが、明治二十二年町村制施行により組合村を解き、大嵐村と合併して鳴沢村となったが、明治三十二年分村独立して鳴沢村となり、今日に及んでいる。翌明治三十三年十二月三十一日現在の戸数は三百九、人口一千二百九十（男六百三十四、女六百五十六）で、文化三年に比し七十一戸、三百十八人の増である。明治二十五年刊行の『山梨県市町村誌』によると、旧鳴沢村（大嵐を除く）の新検反別（地租改正後の反別）は、畑三十八町二反七畝九歩、切替畑百八十二町九反六畝五歩、宅地九町五反七畝二歩、林九十九町三反七畝十二歩、芝地百五十七町四反二畝二十五歩で、切替畑は焼畑耕作であると思われるが、芝地とともにその面積が非常に多い。

明治四十二年	三百十八戸	一千四百九十九人	（男七百五十四	女七百四十五）
大正十四年	三百六十六戸	一千八百六十五人	（男八百九十八	女九百六十七）
昭和十五年	三百八十二戸	二千九十六人	（男一千四	女一千九十二）
昭和三十五年	四百三十三戸	二千三百十六人	（男一千百七十二	女一千百四十四）
昭和五十年	五百三十二戸	二千百三十六人	（男一千二十七	女一千百九）
昭和五十五年	五百六十四戸	二千二百四十九人	（男一千八十一	女一千百六十八）
昭和六十年	七百七戸	二千四百五十五人	（男一千二百五十一	女一千二百四）

三　純農山村から観光村へ

終戦後は帰還兵や引き揚げ者で人口が増加し、ベビーブームもあって三十五年にはピークに達したが、四十年代、日本経済の高度成長に伴って過疎化現象があらわれて人口が減少した。しかし経済の発展と生活の向上に伴う需要に対応して、戦前の農業と山稼ぎが主の純農山村から脱皮して、広大な原野と冷涼な気候という地の利を生かして、高原野菜や酪農を発展させていった。また富士北麓高原の広く美しい自然や鳴沢氷穴などの溶岩洞穴、紅葉台などの観光資源を活用して、富士桜高原別荘地、富士レイクサイドゴルフ場、緑の休暇村や民宿、テニスコートなどの観光施設を充実させ、高原野菜と観光地へと変貌しつつある。従って村内を横断する国道一三九号に沿って役場、学校、公民館、郵便局など主要施設や誘致工場が建てられ、ガソリンスタンドや飲食業などサービス業をはじめ民家も多くなって、鳴沢村の集落の形態が急速に変化しつつある。

一九八五年（昭和六十年）の農業センサスによると農業人口一千八十二人（国勢調査の総人口二千四百五十五人の四四％）（男五百十七人、女五百六十五人）である。これを昭和五十五年農業センサスの農業人口一千二百二十八人に比し一二・一％減となっている。経営耕地総面積は二五、一四六アールで五十五年に比し二〇％減、うち田八、五六一アールで一九・五％減、畑一六、五七八アールで一八・六％減である。公的施設、観光施設、道路、工場や住宅などの増加による耕地の減少であろう。総農家数は二百三十九で専業農家十五、兼業農家二百二十四（うち第一種兼業八十九、第二種兼業百三十五）である。五十五年には総農家数二百八十一（専業七十三、兼業二百八）であるので農家数は八・五％減で、しかも兼業化が進んでいる。

畑作のうちではキャベツが最も多く一五、八八六アール（農家数二百二十）で、次いで大根（三、三二七アール、百七十八）が多い。そのほか、馬鈴薯、とうもろこし、そば、豆類が栽培され、花弁類は四四四アール（十三戸）で高原

野菜とともに特産物となっている。乳牛飼育頭数は九十六（農家六）である。

第三節　小字

旧幕時代、成沢村は、成沢、大田和の両集落から成り、大字を称したのは大嵐村と合併した十年間だけ。旧に復してからは大字は使っていない。

一　寛文九年本畑検地帳による小字

(1)鳴沢地区

西原（にしはら）　西原下道　小成沢　うすだわ（臼田和）　東うすだわ　前はら　境野（坂井野）　水の上　境野尻　大阪　たつぞい　古たつぞい　すミの木　へいぢばら（平次原）　セツとふ　猿口　蛇休場　水の木ぞうり　的場（まとば）　堀の内　桑原　昼やすみば　ところくぼ　釜の口（かねの口）　すなごま　お茶の久保　なミ木　もみの木　古屋敷　尾崎（おさき山）　おきの久保　野老久保　へいぢ原　飯塚　裏林　さるひたい　のっ付場　称付場　炭焼塚　小坂　地蔵前　前地　下宿（この三つは屋敷付畑の地名）

(2)大田和地区

流水　長塚　前原　犬子ぞうり　ゑのこぞうり　あふちの木　大木原　小くれ（小暮）　大持　古大持　的場　宮の前　宮の前道上　家上河原　河原　下河原　みふぞうり　こたいのち　前田和　地くぼ　うら地　前地（この二つは屋敷付畑の地名）

(二)現在の小字

(1)鳴沢地区

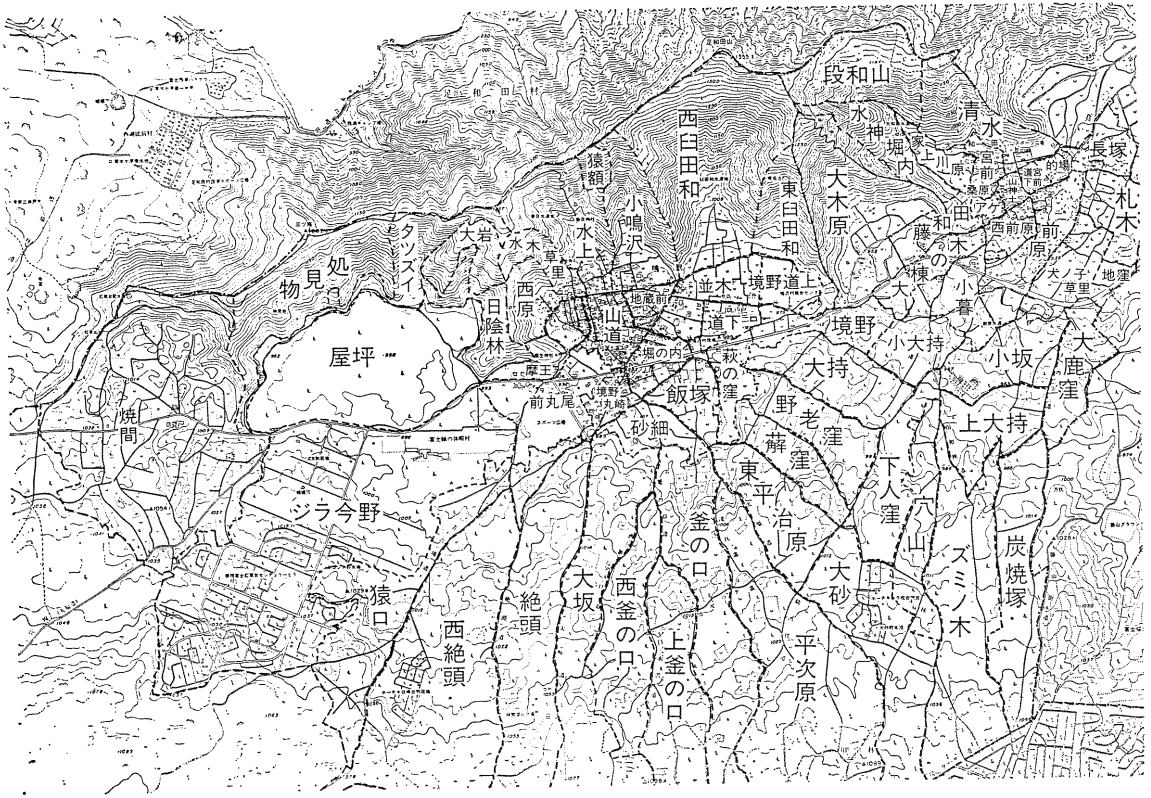
小鳴沢　西臼田和　東臼田和　境野道上　道下　並木　堀ノ内　地蔵前　猿額　水上　山道　的場　水木草里　西原道下　西原　日陰林　魔王　タツヅイ　屋坪　物見処　焼間　大持　萩ノ窪　野老窪　薙窪　飯塚　東平次原　平次原　境野丸崎　砂細　釜ノ口　上釜口　西釜口　大坂　前丸尾　蛇林場　絶頭　西絶頭　ジラ今野　猿口　境野根野　神座　廉の頭　片蓋山　大岩　段和山　富士山　軽水　五六場　大夫根野　野尻　長尾山

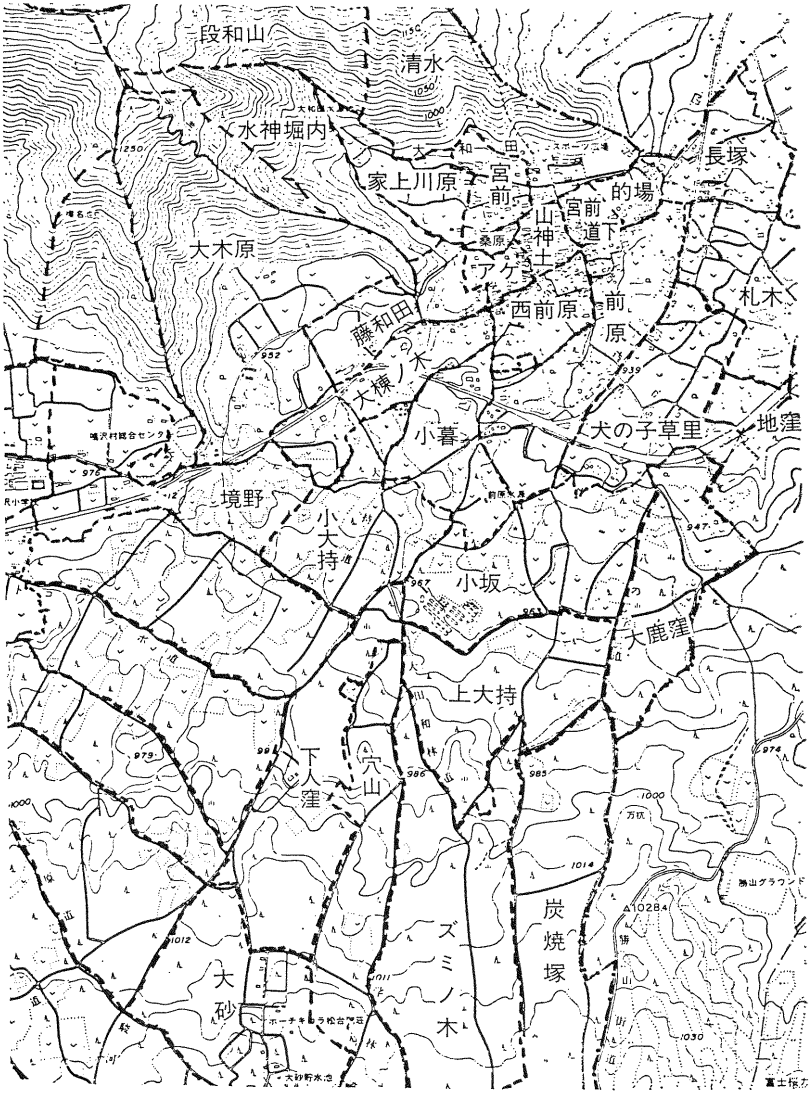
(2)大田和地区

大木原　水神堀内　段和山　清水　家上川原　宮前　藤和田　大棟ノ木　小大持　小暮　西前原　前原　アゲ桑原　山神土　宮前道下　的場　長塚　札木　犬の子草里　地窪　小坂　上大持　大鹿窪　下人窪　穴山　大砂　ズミノ木　炭焼塚

現在の小字名と、徳川初期、寛文年間の小字名を比較すると、同じ名称のものもかなりあるが変わっているものも多く、小字名の由緒を研究することも「地名の研究」として意義あることと思われる。

鳴沢村鳴沢地区の小字


段和山
水神
堀内
清水
長塚
札木
西臼田和
東臼田和
大木原
猿額
小鳴沢
水上
草里
大木
岩つ
タツスイ
処見
物
西原
日陰林
屋坪
仙道
地蔵前
堀の内
並木
道下
境野
上
藤の棟
田和
小暮
大持
小持
大坂
大鹿窪
焼間
玄尾
摩王前
丸尾
境野
丸崎
飯塚
砂細
萩の窪
老窪
野
東平
今野
ジラ
猿口
西絶頭
絶頭
大坂
西釜の口
釜の口
上釜の口
冶原
下人窪
穴山
大砂
平次原
ズミノ木
炭焼塚
上大持



鳴沢村大田和地区の小字

第四節　集落の様相

(一) 鳴沢集落

鳴沢集落は足和田山麓の南向き椀形の平坦な地域に発達している。西は足和田山の尾根が南に延びて小字日陰林、西原、水木草里から、北は水上、小鳴沢、西臼田和、東臼田和と足和田山麓が円形にとりまき、東は大田和との境に足和田の支脈の尾根が境野まで南に延びている。集落はこの平地の北西部足和田山麓に接して発達している。これは足和田山の渓水、特に水上水源（出口）の水を飲料水・生活用水として集落が発達したためである。

旧道は境野から境野道上・道下の間を西に進み、集落の中央を東西に横断して西原道下で鳴沢関所跡を通り、魔王神社前を経て焼間に至っている。この旧道に沿って集落が発達しているが、旧道とほぼ並行している村道と、南の国道とを連絡している数条の南北の道路に沿っても民家が建てられ、集村的な集落であるが、民家はそれほど密集してはいない。

この盆地状の平坦地は、足和田山の渓水を利用して用水路をつくって耕地が発達している純農村地帯である。飲料水は足和田山麓水上（出口ともいう）を水源として、昭和二十八年簡易水道が敷設された。鳴沢地区は春日様配水池三百三十五トン、東の臼

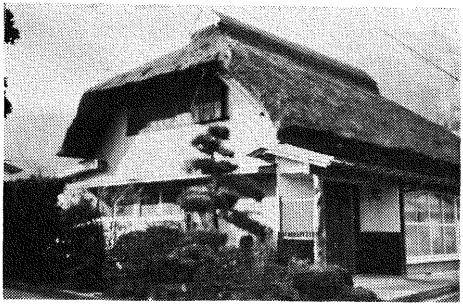
鳴沢地区全景

田和配水池七十五トンを利用してきた。昭和四十年代に入って西湖民宿村の西と北の二ヵ所をボーリングして、青木ヶ原水源を確保した。青木ヶ原第一井戸（深度二十メートル）、第二井戸（深度四十㍍）で、これを青木ヶ原受水池に集めポンプアップして紅葉台まであげて、鳴沢地区、ジラゴンノ、焼間・氷穴方面に給水している。なお昭和六十一年度中には鳴沢部落の南、標高一、一〇〇㍍の小字絶頭にボーリングして、水道用水を確保する予定である。

鳴沢地区は鳴沢村第一区（古くは上組と称した）で、昭和六十一年五月現在、次のような十二組から成っている。

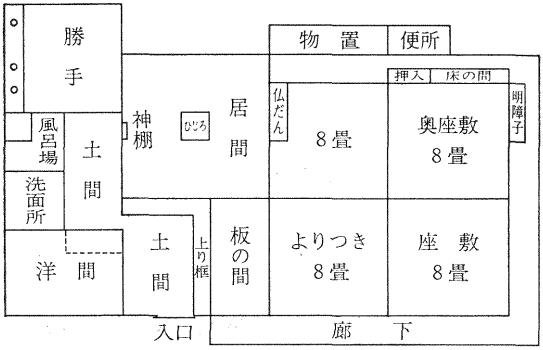
一組（組長渡辺長）四十三世帯、二組（組長中生加紀昭）二十九世帯、三組（組長　小林容生）三十九世帯、四組（組長三浦誠）二十三世帯、五組（組長　小林俊司）三十世帯、六組（組長　小林聡一）三十世帯、七組（組長　三浦武徳）二十六世帯、南八組（組長　吉村真澄）三十四世帯、北八組（組長　三浦裕太郎）四十二世帯、東九組（組長　梶原与作）三十二世帯、西九組（組長　小林喜重）二十三世帯、十組（組長　小林豊孝）二十六世帯。

そして、鳴沢区（第一区）の区長は佐藤秀樹、区長代理渡辺幸美、収入役三浦裕太郎である。



鳴沢地区の草ぶき民家（カブト屋根）

鳴沢・小林美知氏住宅間取り図

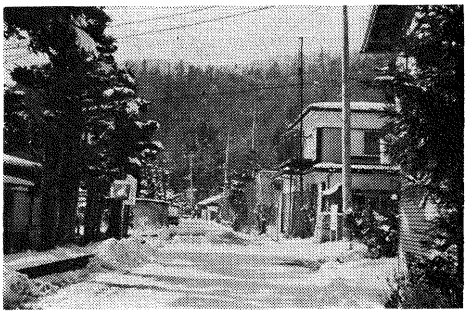


洋間点線下に地下室（アナド）があり、貯桑室に使っていた。

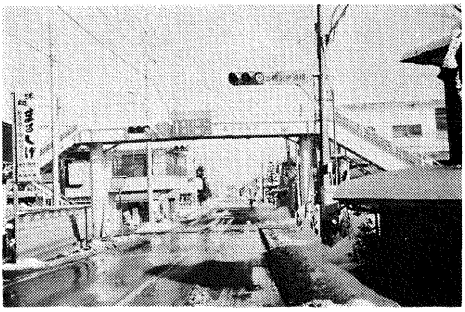
氏神春日神社は足和田山麓水上の春日水源地の近くにあり、その下に成沢山通玄寺とその観音堂がある。西原の旧道に沿って鳴沢関所跡があり、その南に魔王神社がある。旧道に沿っては前丸尾・西原の馬頭観音・水木草里の道祖神・小鳴沢の万霊塔・水木草里の甲子塔・山道の庚申塔などが建っている。

民家は瓦屋根の家はまれで、ほとんどカラートタン葺であって、信州境から北の諏訪の地方とよく似ている。冬季寒冷のためである。草葺の民家も多少残っているが、みなカブト屋根で、河内地方からつづくカブト屋根地域に属する。カブト屋根の草葺にカラートタンをかぶせている家も多い。前頁の間取り図は村長小林美知氏の住宅である。二階は多くの民家で養蚕に使っていた。

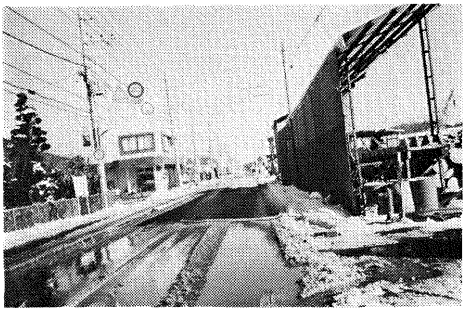
国道一三九号沿道には新しい集落が発達し、村役場、鳴沢小学校、鳴沢郵便局、総合センター（中央公民館）など



旧道沿いの鳴沢集落



国道沿いの新しい集落（鳴沢）

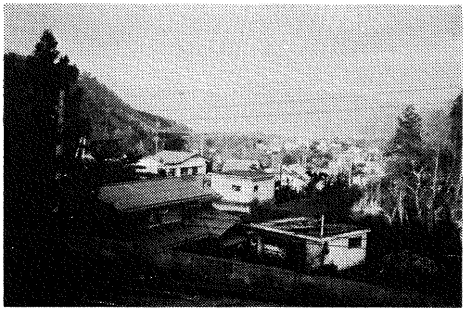


国道沿いの新しい集落

の公的施設が多く、今は村の中心となっている。沿道には、三菱石油や昭和シェルのガソリンスタンド、明見タクシー、都留信用組合鳴沢支店や、味処まるしげ・たこ焼ハンバーガーアメリカンドック、中華料理松鶴など飲食店も多い。日電アネルバなどの誘致工場、緑の休暇村などのレジャー施設や地元の製材工場もこの沿道に発達している。また焼間は紅葉台への登り口で、「紅葉台ふじ」や「ひばりが丘ドライブイン」などの新しい小集落ができている。

(二)　大田和集落

大田和は鳴沢村の枝村であるが、古くから鳴沢と対等な半独立的な集落であって、大嵐村と合併した鳴沢村当時は、大田和に村役場がおかれたし、学校も大田和尋常小学校が設立され、鳴沢に分教場が置かれたほどであった。そして青年団も大田和・鳴沢の二つの青年団があり、いまも婦人会をはじめ各種の社会教育団体や農業協同組合、村行政の面でも鳴沢と大田和は、それぞれ地区的性格をもち、大田和には独立した公民館がある。



大田和地区全景

大田和集落は足和田山麓の二つの突き出した尾根の間に発達した集落であるが、鳴沢のように平坦ではない。坂が多く、小字宮前、家上川原・清水などの足和田山裾が低く、古くいわれる大田川の流路であると思われる。足和田山麓の水神堀内の湧水を用水として、この地に集落が発達したと思われる。旧道は集落の中央を南西から北東に横断しており、坂道であるがその沿道に集落が発達している。鳴沢よりも民家の集積度が密な集村で、純農村である。

昭和二十八年、水神堀内の湧水を水源として簡易水道を施設した。足和田山麓の小字水神堀内が大田和水道の水源地である。四十年代に入って南の小字前原地内を

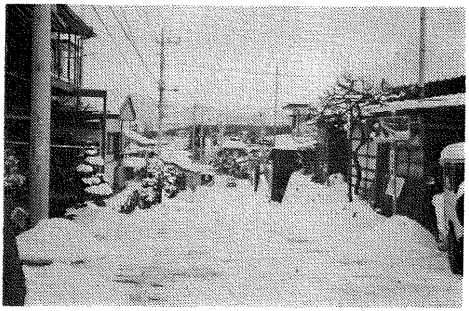
ボーリング（深度百十二尺）して水道用水としている。

大田和は鳴沢村第二区（古くは下組と称す）で、六組から成っている。その組の構成は六十一年五月現在次の通りである。

一組（組長　渡辺百栄）十八世帯、二組（組長　渡辺力）十七世帯、三組（組長　渡辺芳二）二十一世帯、四組（組長　渡辺一二）三十六世帯、五組（組長　三浦武秀）四十世帯、六組（組長　渡辺正孝）四十三世帯。

第二区区長は渡辺喜猶、区長代理渡辺利正、収入役渡辺芳二である。

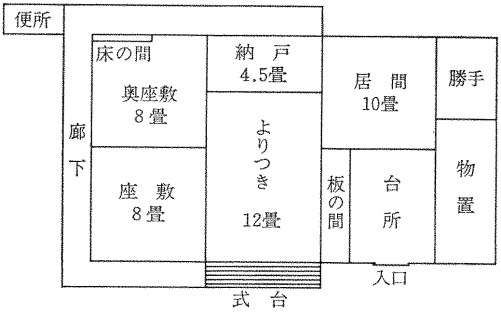
この鳴沢地区（第一区）、大田和地区（第二区）のほか、組織外として鳴沢に四十五世帯、大田和に二十九世帯があり、富士山荘特別養護老人ホームに五十一世帯、日電アネルバ寮四十一世帯がある。



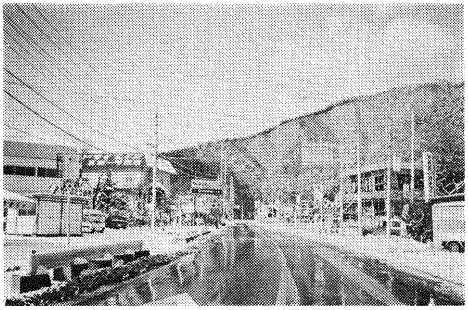
旧道沿いの大田和集落

小字宮前に氏神八幡神社があり、旧道に沿って前原の西国秩父坂東供養塔、薬明王大権現、桑原の馬頭観音などがある。また公共施設として大田和公民館、スポーツ広場、鳴沢村外一町二ケ村恩賜林保護組合役場、鳴沢村農協大田和支所などがある。

民家は鳴沢と同じく瓦屋根はまれで、多くがカラートタン葺であるが、古い民家は草葺のカブト屋根造りが残っており、それにカラートタンをおおっている家



大田和・渡辺和一郎氏住宅間取図



国道沿いの新しい集落

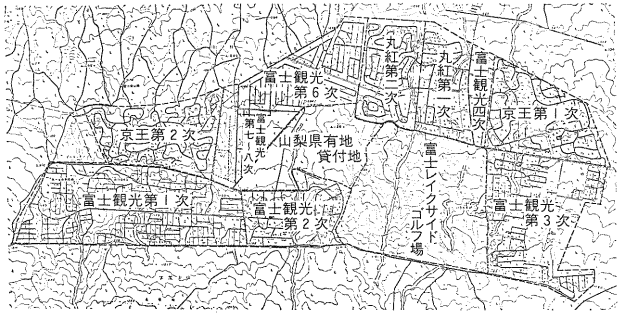
も少なくない。民家の間取り図は渡辺和一郎氏住宅である。

新道（国道一三九号線）には新しい集落が発達し、ドライブインスポーツ民宿、ドライブイン庭富士、ホテルジョイ、民宿鳴沢荘、テニスグランド吉野荘、ホテル丘など、観光産業による新しい集落の景観を呈し、純農村の旧村と対照的である。鳴沢地区でもそうであるが、純農村と新しい観光都市型の集落が背中合わせになっていることが鳴沢村の特色である。なお境野付近にはシーメルテック株式会社富士工場や、富士キャビネット興業株式会社などの工場がある。

(三)　別荘地

鳴沢村の南部、富士裾野の標高一〇五〇㍍～一二〇〇㍍の広大な区域（県有地を除く五百三十八ヘクタール）に、富士桜高原別荘村があり、ジラゴンノの日電アネルバの南、標高一〇五〇㍍の土地に蝶理富士紅葉台センチュリービラがある。

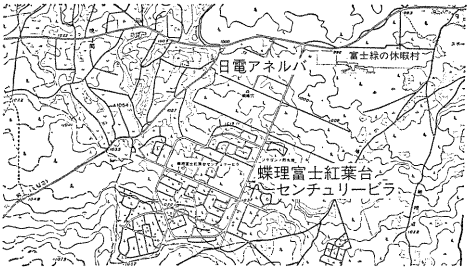
富士桜高原別荘村の富士観光第一次別荘地は昭和三十五年、第二次別荘地は三十八年、第三次別荘地は四十三年、第四次から第八次までは四十八年に造成されたが京王スバル高原第一次別荘地は昭和四十三年、第二次別荘地は四十七年に造



富士桜高原別荘村

成された。丸紅富士桜第一次別荘地は昭和四十四年、第二次別荘地は四十八年に造成された。そのほか、相互住宅富士桜別荘地があり、別荘地の中央には富士レイクサイドゴルフ場がある。このゴルフ場は、昭和三十五年十一月にオープンした百十八ヘクタールの面積と十八ホールのあるゴルフ場で、会員一千八百人をもち、年間利用者三万六千人、利用日数二百八十日を数えている。富士桜高原別荘村は、このゴルフ場を中核としてその周囲に造成されたものである。

この別荘地と、蝶理富士紅葉台センチュリービラ、その他の別荘地の分譲地別、地積別区画数、建物数を示すと次のようである。



蝶理富士紅葉台センチュリービラ

分譲地名	総地積	区画数	建物数
富士観光第一次	八二・八ha	一、四二四	一五七
富士観光第二次	三四・九ha	三二七	九九
富士観光第三次	七六・五ha	八四七	二七八
富士観光第四次	一一・三ha	一二二	四八
富士観光第五次	九・九ha	九五	三三
富士観光第六次	一・五ha	一五三	四一
富士観光第七次	二・七ha	九	〇
富士観光第八次	三・五ha	五六	一

（昭和六十一年十月一日現在）

京王富士スバル高原第一次	四九・六ha	五五五	一六五
京王富士スバル高原第二次	四九・六ha	七六六	三〇〇
丸紅富士桜別荘地第一次	三四・八ha	四七六	一五四
丸紅富士桜別荘地第二次	三四・八ha	六一六	一七五
相互住宅富士桜別荘地	三・九ha	六〇	七
		（以上富士桜高原別荘村）	
蝶理富士紅葉台センチュリービラ	五五・〇ha	一、二〇〇	二〇〇
ホーチキするが台	一・五ha	一七	二
ホーチキからまつ台	一〇・〇ha	一五六	一六
ホーチキしらかば台	四・一ha	八三	八
やすらぎの森別荘地	二・四ha	七五	一一